

石綿使用量に比例 胸膜のがん増える

疫学調査

発がん性が指摘されている石綿(アスベスト)の使用量と比例し、胸膜(肺の内面を覆う薄い膜)などにできる珍しいがん、中皮しゅの死者数が増えていることが、森永謙一・大阪府立成人病センタ

ー医師ら研究チームの疫学調査でわかった。五日、大阪市天王寺区の大阪国際交流センターで開かれた日本肺癌学会総会に発表された。石綿使用量が急増した昭和五十年代の大

阪、兵庫など八府県二市の中皮しゅの死亡率は百万人に一人前後と少ないが、発病後一、二年で死亡するケースが大半。しかし、これまで厚生省も死亡統計をとっておらず、石綿との因果関係を調べた疫学調査がないことから実

態は把握できなかった。同医師らは、大阪、兵庫など全国八府県と広島、長崎両市の「地域がん登録室」と協力、石綿使用量が年間二十万トを超えた五十二年から八年間の中皮しゅ死者をピックアップ。この結果、五十二年から二年間は三十五人(男二十五人、女十人)だったが、使用量が急増した五十八年から二年間では九十八人(男六十九人、女二十九人)と二・八倍に増加。同医師らが中心の「大阪中皮しゅ研究会」が四十二年から十八年間の大阪府内の死亡例についても調

石綿米 京大、7教室の使用中止

京都大学教養部(京都市左京区)は五日までに、発がん物質のアスベスト(石綿)が使われている七講義室の使用を中止した。大学当局は大学構内全施設を対象にアスベ

スト使用実態調査と飛散防止対策のため、学内の専門家による「アスベスト問題協議会」(高月紘・環境保全センター教授ら六人)を設置した。環境問題に詳しい学内グル

ーブが教養部の四棟約六十教室のうち、A号館西棟(地上三階、地下一階、四十三年建設)の講義室で石綿がはげ落ちるままになっているのに気づき、調べたところ、八講義室中七室の天井や壁にアスベストが断熱材として二、三センチの厚さで塗られていた。